

人、モノ、情報が行き交った街道と宿場町の物語

熊本県北地域には、その昔、豊前街道、豊後街道という大きな道がありました。道は人やモノだけではなく情報を運ぶメディア。旅人が街道沿いの町に情報をもたらし、特に宿場町には情報が集まり、独自の文化や生活様式を生み出してきました。

豊前街道の宿場町山鹿は米の集積地となっていたこともあり、この街道随一の賑わいがあったと言われています。多くの人々が行き交っていたことから、室町時代から和紙と糊だけで作られる灯籠が工芸品として作られるなど粋な文化が育まれてきました。

明治時代に建てられた芝居小屋「八千代座」は繁栄する町のシンボルとして、「どこに出しても恥ずかしくないものをつくろう」という意気込みによるもの。昭和40年代には老朽化し、取り壊し寸残の状態でしたが、地元の人々が「瓦一枚運動」を展開。平成2年からは「坂東玉三郎舞踊公演」が市民の手作りで行われ、全国にその名が知られることになりました。

もうひとつの山鹿の象徴「さくら湯」も地元の人々の心意気で守られ、受け継がれてきたもの。明治維新の頃に存続の危機に。この時、地元の旦那衆が多額の私財を投じ大改修し、以来、町のシンボルに。その後、再び復活。この時も多くの市民が募金を寄せ合っています。

このほかにも、大正時代、当時はまだ珍しかったピアノを地元の木工職人が製作。合計十数台製作され、そのうち1台だけ現存しており、山鹿市博物館で保管されています。また明治8年には日本初の紅茶伝習所が山鹿に設置され、約30年間紅茶を製造しており、その当時の味を復刻させた紅茶を市内の店で味わうことができます。

豊前街道を北に進んだ次の宿場町、南関町は古代には官道が通り、関所が設けられた地。江戸時代の参勤交代に際しては肥後国内における最後の休憩地、宿泊地であり、藩主はじめ藩士のための御茶屋が設置され、今も修復された御茶屋跡が大切に守られています。

一方、大津町も豊後街道の宿場町として栄えました。加藤清正が作らせた井手沿いの道には石橋などがあり、町中心部から阿蘇外輪山に続く街道は清正公道と呼ばれ、当時のままの部分も。菊陽町から大津にかけての杉並木にも当時の雰囲気を感じ取ることができます。大津町には梅の造花が伝統工芸品として残されていますが、これは熊本藩主が幕府への手土産として献上したことから盛んになり、町の指定文化財になっており、その技術が今も受け継がれています。

街道には歴史と人のドラマが隠されており、遥か昔から道を行き交った大勢の人々の息遣いが聞こえてくるかもしれません。このストーリーは、街道というメディアを行き交った人、モノ、情報と、地域の人々の暮らしや文化を紐解いていくものです。